
超人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超人

【Nコード】

N2239S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

精神病院の中である哲学者が死のうとしていた。その死の姿は、ニーチェの最期を扱った作品です。

第一章

超人

ある病院でだ。こんな話がされていた。

「今日もか」

「はい、今日もです」

若い白衣の医師が壮年の医師に述べていた。

「相変わらずです」

「乱れたままか」

「やはり。何をしても」

「それはわかっているにしてもだ」

壮年の医師は困った顔で若い医師に言うのであった。

「しかし。それでもな」

「それでもですか」

「素晴らしい人物だった」

そうであったとだ。こう若い医師に話すのである。

「君もあの患者のことは知っているな」

「何でもかつては学者だったとか」

「哲学者だった」

壮年の医師はこう話した。

「そう、かなり個性的な、な」

「個性的だったのですか」

「そうだ。あんな哲学者はいなかった」

ここまで言うのだった。

「だからこそ素晴しかった」

「そうだったのですか」

「神は死んだ」

壮年の医師は顔を見上げさせてこの言葉を出した。

「この言葉もな」

「神は死んだ、ですか」

「人は超人になれと言ったのだ」

「超人ですか」

「そうだ、それが彼の言葉だった」

言葉はどれも過去形だった。それしかなかったのだ。

「だが。今はな」

「最早何を言っているのかわかりませんし」

「日常生活すらできなくなっているからな」

「廃人です」

若い医師は唇を口の裏から噛み締めながらこう言った。

「最早。あれは」

「そうとしか言えないな」

「はい」

壮年の医師の言葉にも答えた。

「あれでは」

「それはわかっている」

壮年の医師も頷く。

「残念だがな」

「残念ですか」

「惜しい」

また顔をあげてだった。だが今度の顔は目を閉じてそのうえで何かを堪えるような。そうした顔になっての言葉であった。辛いものだった。

「あれだけの哲学者がああなるとはな」

「原因もわかりませんし」

「そうだな。それはな」

「しきりに頭を抱えてはいますが」

「梅毒ではないか」

「眼病でもないようです」

この二つは否定された。

「頭の中に何かがあるようですが」

「それによつてか」

「ではないでしょうか」

「神も残酷だ」

壮年の哲学者は今度は神にたいしてこつ思わざるを得なかった。

「全くな。己を否定したからだろうか」

「その神は死んだという言葉ですか」

「そのせいか」

壮年の医師は今度は考える顔になった。

「それで。狂気に陥つたのか」

「あの様になつて」

「今はもうどうにもならない」

壮年の医師は今度は首を横に振つた。

「あれではな」

「それでなのですが」

若い医師がまた彼に言つてきた。

「最早幾許もありませんし」

「家族を呼ぶか」

「妹さんがおられましたね」

「うむ、常に世話をしてくれている」

「あの方を御呼びしましょう」

こつ壮年の医師に提案するのだった。

第二章

「それでどうでしょうか」

「いいな」

壮年の医師も彼の提案に頷いた。

「では。すぐに御呼びびしてくれ」

「わかりました」

こうして細面ですらりとした中年の女が病院にやって来た。黒い服を着ており髪は上で束ねられている。その表情は暗い。

彼は二人の医師のところに来てだ。まずはこう問うたのだった。

「兄は」

「残念ですが」

「間も無く」

「そうですか」

それを聞いてだ。彼女はその暗い顔で頷くのだった。

「遂になのですね」

「お傍にいて下さい」

「宜しいでしょうか」

「はい」

断ることはなかった。すぐに答えた。

「それでは今から」

「そしてです」

「私達も御一緒させて頂いて宜しいでしょうか」

「御願います」

女は二人の申し出をよしとした。そうしてまた言うのだった。

「兄も。喜んでくれます」

「そうですか」

「喜んでくれますね」

「必ず。そうしてくれます」

こう二人に話すのだった。

「ですから」

「わかりました。それでは」

「今より」

こうしてだった。二人の医師もまた彼女と共にある病室に向かった。コンクリートの病棟は暗く冷たい。扉はどれも鉄のものでありそれがさらに暗さと冷たさを見せていた。

その暗い病棟の中を進みながらだ。妹は兄のことを話すのだった。

「兄は。父がいませんでした」

「その様ですね」

「幼くしてですね」

「私もですが兄にとってそれは大きかったようです」

そうだったというのである。

「長じて学者になり」

「ギリシア悲劇を読まれてましたね」

壮年の医師が言ってきた。歩く度に硬質の音が病棟に響く。それが音楽にもなっていたが実に冷たい曲であった。まるで葬送曲のようだった。

「そうでしたね」

「そして音楽も」

「あれですか」

「その中で生き。愛し」

愛があつたともいふのだった。

「そして裏切られたと思ひ憎み」

「そのうえでなのですね」

「そうです。ああなつてしまいました」

妹の顔がここで俯いたものになった。

「それが兄です」

「そうでしたか」

若い医師は彼女のその言葉に俯いた顔で頷いた。

「それがあの方でしたか」

「兄は常に彷徨っていました」
「こつも言う彼女だった。」

「安住の場所を見つけることはできませんでした」

「そして今、ですね」

「その彷徨っていた世界から」

二人の医師がここで言った。

「去ります」

「そうなります」

「そうですね。それから何処に行くかはわかりませんが」

神を否定した彼だからだ。とても神の場所に行くとは思えなかったのだ。それはこの妹だけでなくだ。二人の医師も思うことだった。

そしてそのうえでだ。彼等は話す。

「しかしそれでも」

「見守りましょう」

「その旅立つ時を」

「そうさせてもらいます」

妹の言葉がここで強いものになった。

第三章

「是非」

「それではです」

「こちらに」

一行はある扉の前に来た。やはり黒い鉄の重く冷たい扉だった。まるで全てを遮断するような。そうした暗いものを感じさせる扉だった。

その前に来てだ。二人の医師がまた彼女に話した。

「では。いいですね」

「今からです」

「はい」

彼女はだ。二人の言葉にこくりと頷いた。これが返事だった。

「御願います」

「わかりました。それでは」

「中に入りましょう」

こうして中に入るのであった。するとだ。

殺風景な、コンクリートの壁の他はこれといって何もない部屋の隅に粗末なベッドがある、それだけの部屋だった。そしてその粗末なベッドにであった。

彼が寝ていた。そしてだ。

三人はその顔を見る。大きな口髭がある。

だが髪も肌も何もかもが乱れたままだ。そして目を閉じて寝ていた。

妹はだ。その兄を見てから医師達に尋ねた。

「やはり兄は」

「はい」

「相変わらずでした」

これが返答だった。

「やはり。何かわからないことを述べられ」

「そしてただ虚ろな目で」

「そうですね。変わらないんですね」

「かつての知性は何処にも」

壮年の医師の言葉は悲しむものだった。

「完全に失われてしまっています」

「確か」

若い医師も言う。

「この方はこの国に知られた方だったのですね」

「そうだ。君は哲学は読まないのだったな」

「どうも性に合わないの」

それでだというのである。

「それで」

「そうか。それなら知らなかったのも道理だな」

「申し訳ありません」

「謝る必要はない」

壮年の医師はそれはいいとした。

「だが、だ」

「この人はですか」

「知っておいてくれ。これからな」

「わかりました」

「間も無く。この世を去るのだから」

だからだというのだった。確かに彼は今死のうとしていた。その

荒れた肌は土色になっている。今まさにこの世を去ろうとしている。

その彼を見てだ。妹は兄に声をかけた。

「兄さん」

「.....」

返事はない。目を閉じて寝ているだけだ。

それでもだ。妹は兄に声をかけるのだった。

「最後に何か望みはあるかしら」

「もう。何も飲まれないし召し上がられもしません」
「何もです」

医師達がここで話すのだった。

「そして何も欲しがることはありません」

「わからないことを呟やかれるだけです」

「そうですか」

「はい、ですから」

「もう」

「こうして」

医師達の言葉を聞いてだ。妹は悲しい顔で述べた。

「最後を見守ることしかできないのですね」

「まことに残念ですが」

「今は」

「わかりました」

妹も二人のその言葉に頷いた。

「それでは今は」

「おそらく。あと数日です」

「もってです」

それだけだというのだった。三人はそれから彼の枕元に控え続けた。椅子を置きそこに座ってだ。彼がこの世を去るのを見届けようとしていた。

第四章

彼は何も喋らず目も開かない。ただ時だけが過ぎていく。それで二日が過ぎた。そして三日目の朝にだ。

不意にだった。

「………ワ」

「!？」

「今口が」

二人の医師が最初に気付いた。

「口が動いた」

「まさか」

「はい、確かに動きました」

妹もだ。それがわかった。

「今。兄の口が」

「そして言葉を」

「言いましたね」

「ええ、間違いなく」

「ワグナー」

そしてだった。彼は言ったのだった。

「ワグナー、やはり私は」

「ワグナー」

「あの音楽家が」

二人の医師もそれが誰かわかった。この時代のドイツを代表する音楽家である。その音楽はまさに圧倒的であり巨人と言っている存在だ。

その彼の名を聞いてだ。妹も言った。

「兄は当初ワグナーに心酔していました」

「そうですね」

壮年の医師が応えた。

「ですがそれは」

「そうです。やがて憎しみに変わりました」

「そうだったというのだ。彼とワーグナーの関係は。」

「最後にはペストとまで言いました」

「ペストですか」

若い医師はそれを聞いて顔を顰めさせた。そのうえでの言葉だった。

「それはまた」

「きついというのだな」

「はい、幾ら何でもペストとは」

若い医師はこう壮年の医師にも返した。

「あんまりなのは」

「そうだな。それはな」

壮年の医師もそれは否定しなかった。

「だが。裏を返せばだ」

「それだけ、ということですか」

「そう、愛していたのだ」

愛が憎悪になった。そういうことなのだ。

「ワーグナーを。その音楽を」

「そこまでだったのですか」

「そう、愛していたのだ」

「そうだったというのだ。そしてだ。」

妹もだ。兄のその言葉を聞いてだった。

「兄さん、あの人とは別れたのじゃ」

「私は。やはり」

だが、だった。兄は言うのだった。目を閉じたまま言葉だけを出していく。

「貴方が」

「あの人が」

「貴方の音楽も全てを愛したい」

そうだとするのである。

「だから。これからは」

「これからは」

「貴方を。貴方の全てをもう一度……」

ここまで言っただった。言葉を止めた。そして息もだ。

それを見てだ。二人の医師は顔を見合わせあった。そしてだ。

頷き合いそしてだ。若い医師が彼の脈を見た。それからこう彼女

に話した。

「ご臨終です」

「そうですか」

「しかし。今のは」

「はい、聞きました」

彼女はこう医師達に答えた。

「兄は確かに」

「最後に取り戻しましたね」

「その心を」

「それは。幸せなことです」

妹は兄を見ながら微笑んでいた。

「長い間の苦しみから解き放たれ。最後に」

「そうですね。本当に」

「この方にとつては」

「今まで有り難うございました」

彼女は今度は医師達に対して礼を述べた。

「兄を。どうも」

「いえ、それは」

「お気遣いなく」

二人はそれはいいとしたのだった。そうしてこの最後に己を取り戻した彼を葬るのだった。それで全てが終わったのであった。

フリードリヒ・ニーチェは死んだ。しかしその最後に彼がどうなったのか、何を話したのかは誰も知らない。その見ていたものもだ。

だが彼はそこに何かを見ていたのだろう。それを知る術はないが知っている者はいた。それは確かなことでありこの世を去った彼への最後の幸せだった。

超人 完

2010・10・31

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2239s/>

超人

2011年4月4日22時40分発行